



地下空間の利用推進 土木学会がシンポ

土木学会は17日、東京・西早稲田の早大国際会議場で、第12回地下空間シンポジウムを開いた。地下空間研究委員会委員長の大西有三京大大学院教授は、「本年度は普及小委員会を立ち上げた。

地下空間の利用をさらに「論じた」写真。進めるため、一般の人びとにPRすることもかねて「あいさつ」した。シンポジウムは、「歴史に学ぶ地下空間利用」をテーマに、岸井隆幸日大教授がコーディネーターを務め、竹内直文国土交通省官房技術審議官、大西教授、越澤明北大大学院教授、小沢詠美子成城大民俗学研究所研究員がパネリストとなって議

論した。写真は、3会場に分かれて発表された。



ヨンのほか、3会場で研究論文発表も行われた。冒頭、大西委員長は、06年度から普及小委員会を設置し、地下利用を一般に認知してもらうためのPR活動を展開していることを紹介。「大深度地の事例を挙げ、「江戸時代の事例として地下街を取り上げる近郊交通が発達し、相互乗り入れによって地下空間が活用されたことなど明らかにした。大西委員長は「ニーズはあるのに地下空間の利用が進んでいない」と指摘。閉鎖的空間で避難しにくく、建設費も高いというイメージを要因として挙げ、「地下利用をさらに進めるためには、正しい情報を分かりやすく一般に伝える必要がある」と述べた。新技術の開発・採用を積極的に進めながら、ニーズを的確に把握し、社会的に望まれていく地下空間利用を提案する必要があるという。

地下空間利用は江戸時代から

土木学会
シンポジウム

土木学会の地下空間研究委員会(委員長・大西有三郎、新大西大教授)は17日、新宿区西早稲田にある早大国際会議場で行われた「地下空間シンポジウム」を開いた。同委員会が毎年開いている行事で、「歴史に学ぶ地下空間利用」をテーマに有識者によるパネルディスカッションは、日大の岸井隆幸教授

下使用法の後で少しずつ代にも地下空間が利用された。都心部への機能集積が、昭和40～50年代の相次ぐガス爆発や火災で利用が規制された。関係者からは、近代の都市づくりにおける地下利用の歴史を、大阪の御堂筋が地下鉄と一体整備されたこと、東京では民間により

地下利用の歴史テーマに

第12回地下空間シンポジウム開く

土木学会

土木学会地下空間研究委員会(委員長・大西有三京都大学大学院教授)は17日、東京・新宿区の早稲田大学国際会議場で、第12回地下空間シンポジウム「歴史に学ぶ地下空間利用」を開催した。冒頭、大西委員長は



パネルディスカッションの様子

「多くの皆さんのおかげで活発な活動状況を維持でき12年目を迎えることができたことに感謝するとともに、今後の支援もお願いしたい」と挨拶したのち、同委員会の活動を報告。「地下空間の利用を更に促進させるため、新たに普及小委員会を設置した。地震時の安全性も一つのPRのポイントとなる」と述べた。引き続き、大西委員長

のほか、竹内直文国土交通省大臣官房技術審議官、越澤明北海道大学大学院教授、小沢詠美子名城大学民俗学研究所研究員がパネリストに加わり、岸井隆幸日本大学教授をコーディネータに、歴史に学ぶ地下空間利用をテーマにパネルディスカッションを行った。

小沢研究員は、江戸の地下事情を遺跡の写真や資料を基に紹介し、中でも江戸の町に良く見られた穴蔵の使い方や、当時の人たちの評価、穴蔵の終焉をわかりやすく解説した。越澤教授は、大正時代以降の時代背景や資料を基に、地下の交通施設と都市計画、共同溝と美観、高速道路の高架と地下化などについて講演したのち、竹内審議官が、地下街整備を参考に、近代・現代の地下利用について、地下利用ガイドプランや大深度地下使用方法などを事例を交えて紹介した。大西委員長は、進まない地下利用に対し、利用促進には、▽利用実態のPR▽マーケティング▽新たな利用方法の創出▽コスト削減——の課題を指摘。これらの発表を受けパネルディスカッションへと移った。

またパネルディスカッション後は3会場に分かれて、地下空間利世に関する論文発表が行われた。